

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## The Inspection and Application of hentaigana for Academic Information Exchange in the Study of kanajitai

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 銭谷, 真人, ZENIYA, Masato メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000862">https://doi.org/10.15084/00000862</a>

## 仮名字体研究における「学術情報交換用変体仮名」の検証と応用

銭谷真人

国立国語研究所 研究系 言語変化研究領域 非常勤研究員

### 要旨

「学術情報交換用変体仮名」(以下、学術用)は、変体仮名を ISO/IEC10646 に提案するために選別されたものであり、本稿はそれに先駆けて、仮名字体研究における学術用の利用方法を模索したものである。まずは変体仮名の用いられているテキストに学術用を当てはめ、その有用性を検証した。検証には『秋萩帖』、『源氏物語』より「柏木」「桐壺」、『仮名書き法華経』の四種のテキストを用いた。その上で、従来の仮名字体研究においてはあまり扱われてこなかった「連綿」に注目し、学術用で作成した字体のデータベースに連綿に関する項目を加え、字体の使い分けの要因を新たな視点で検証する研究を試みた\*。

キーワード：変体仮名、仮名字体、表記研究、連綿、書記原理

### 1. はじめに

現在、国立国語研究所のホームページにて「学術情報交換用変体仮名」(<http://kana.ninjal.ac.jp/>)が試験公開中である。これらの字体は、変体仮名に文字コードを持たせ、国際規格 ISO/IEC 10646 への収録を提案するために、「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」プロジェクトの一環として、選ばれたものである。選別作業の経緯については、第 30 回表記研究会「Unicode への変体仮名セットの提言」(2014 年 9 月 28 日)においても、小助川貞次氏らのプロジェクトメンバーとの共同発表を行った。その後も検討を重ね、日本語学会 2015 年度春季大会「学術情報交換のための変体仮名セット」(2015 年 5 月 24 日)における共同発表(高田ほか 2015)を経て、2015 年 10 月に行われた ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 第 64 回松江会議において、国際規格として提案を行った。なお「学術情報交換用変体仮名」(以下、学術用)は提案の際に必要なであろう字体を選別したものであり、学術用そのものを日本提案として提出した訳ではない。既に戸籍統一文字として行政処理に用いられていた変体仮名と、学術用の和集合が日本提案の変体仮名である<sup>1</sup>。実際に提案した字体は文字情報基盤整備事業のサイトで公開されており<sup>2</sup>、また日本提案文書は Unicode のサイトで閲覧することができる<sup>3</sup>。

\* 本稿は国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」(プロジェクトリーダー:横山詔一)の研究成果の一部である。本稿の内容は第 34 回表記研究会口頭発表(個人発表、2016 年 1 月 23 日)「仮名字体研究における学術情報交換用変体仮名の応用について」に基づいている。本稿を執筆するに至るまでの過程で共同発表を行い、様々な助言も下さったプロジェクトメンバーの方々にお礼を申し上げる。またプロジェクトメンバーでもあり、本稿に欠かせない資料を提供して下さい下さった専修大学の斎藤達哉先生には改めて感謝申し上げます。

<sup>1</sup> 高田智和 (2016) に詳しい。

<sup>2</sup> 「MJ 文字情報一覧表 変体仮名編」<http://mojikiban.ipa.go.jp/4488.html>

<sup>3</sup> 「Proposal for Japanese HENTAIGANAs」<http://www.unicode.org/L2/L2015/15239-hentaigana.pdf>

今後正式に文字コードが与えられ、デジタルデータとして利用できるようになるまでには、まだ相当の時間を要することが見込まれる。ただ前述のように、既に学術用の字形画像自体は公開されており、IPA（独立行政法人情報処理推進機構）およびNINJAL（大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所）の著作物であるということを明記すれば、誰でも利用が可能である。本稿においては、この学術用を用いた仮名字体研究の展望について述べていきたい。

## 2. 「学術情報交換用変体仮名」の検証について

学術用の選別の経緯に関しては、前述の共同発表「学術情報交換のための変体仮名セット」（高田ほか 2015）に詳しく述べられているので参照されたい。学術用のベースは近現代の活字見本や現代の変体仮名フォントであり、個々の仮名資料から変体仮名を集めて帰納的に作られたという訳ではない。そのためまずは実際のテキストにおける個々の平仮名について、本当に学術用が対応しているかどうか、検証が必要である。有用性を確かめた上で、応用について考えていきたい。

本稿においては三種のテキストを用いて学術用の応用について模索していくが、まずそれらを用いて有用性の検証を行う。三種のテキストは既に翻刻が電子テキストとして存在するもので、以下の通りである。

- ①米国議会図書館本『源氏物語』「柏木」（以下、①柏木）室町～江戸、（電子テキスト作成：国立国語研究所）<sup>4</sup>
  - ②専修大学本『源氏物語』「桐壺」（以下、②桐壺）室町後期、（電子テキスト作成：専修大学文学部日本語学科 斎藤達哉研究室）
  - ③足利本『仮名書き法華経』（中田編 1974）「第六軸」（以下、③法華経）鎌倉末期、（電子テキスト作成：専修大学文学部日本語学科 斎藤達哉研究室）
- さらにこれらとは別に、『秋萩帖』を取り上げて、有用性を検証する。
- ④『秋萩帖』（古谷 1996）全文（以下、④秋萩帖。上記の三種とは異なり、応用の検証には用いないので、便宜上 0 とした）平安中期

仮名資料の多くは、現行の字体の中に変体仮名が混じっているという印象を受けるものが多いが、最初期の仮名資料である④秋萩帖は、変体仮名の中に現行の字体が散見されるという印象を受け、非常に変体仮名の含有率が高いものであると考えられる。これに対応していれば、大抵の仮名資料についても対応できているのではないかと推察できる。むしろ、そこに用いられる変体仮名が、他の全てのテキストの変体仮名を内包しているという訳ではなく（そうであれば④秋萩帖の変体仮名をそのまま学術用にすれば良い）、これ程の多様な変体仮名を有するテキストに対応できているならば、それ以外の多様な変体仮名を持つテキストにも対応可能なのではないかとということである。ただやはり学術用の有用性の検証は、今後様々な時代やジャンルの文献について行わなければならない。④秋萩帖以外にも多様な変体仮名が用いられている『元永本古今和歌集』

<sup>4</sup> 「米国議会図書館蔵『源氏物語』 翻字本文」（国立国語研究所）<http://textdb01.ninjal.ac.jp/LCgenji/> 「米国議会図書館蔵『源氏物語』 画像 桐壺・須磨・柏木」（国立国語研究所）[http://dglb01.ninjal.ac.jp/lcgenji\\_image/](http://dglb01.ninjal.ac.jp/lcgenji_image/)

(平安末期)なども対象とするべきであろう。学術用の有用性については、今後も課題が残るものと思われるが、本稿においてはひとまず、

①秋萩帖 ①柏木 ②桐壺 ③法華経

の四種を用いて検証を行いたい。

①秋萩帖の全文(全48首1491文字)、①柏木②桐壺③法華経の各約5000字(詳細については後述)において使用されていた字体について、学術用に該当するものがあるかを、当てはめていった結果が表1である。各字体について、それぞれのテキストにおける使用の有無を○×で示している。

学術用については、字体欄に画像を示し、備考欄に整理番号を示した。学術用には現行の字体は含まれていないので、現行の字体が使用されている場合には、備考欄に「現行の字体」と記し、字体欄にはそのまま現行の平仮名を示した。また学術用に該当する字体がない場合は、備考欄に「学術用に該当字体なし」と記した上で、字体欄には実際にテキストで使用されている文字の画像を字体の例として示している。また参考として、各字体の字母も併記した。

表1 四種のテキストにおける仮名字体の使用状況

字母	字体	備考	①秋萩帖	①柏木	②桐壺	③法華経
安	あ	現行の字体	○	○	○	○
安	あ	010010010	○	×	×	×
安	あ	010010020	○	○	×	×
阿	あ	010040010	○	○	○	○
以	い	現行の字体	×	○	○	○
以	い	020010010	○	×	×	○
意	い	020030010	○	×	×	×
移	い	020050010	○	×	×	×
伊	い	020020010	×	×	○	×
宇	う	現行の字体	×	○	○	○
宇	う	030020010	○	×	×	×
有	う	030040010	○	×	×	×
雲	う	030050010	○	×	×	×
衣	え	現行の字体	×	○	○	○
衣	え	040050020	×	○	○	○
江	え	040020010	×	×	×	○
要	え	040060010	○	×	×	×
於	お	現行の字体	○	○	○	○
於	お	050010010	○	×	×	×

於	お	050010020	×	○	○	○
加	か	現行の字体	×	○	○	○
加	か	060020010	○	×	×	×
可	の	060030010	○	○	×	×
可	う	060030020	×	○	○	○
我	ゑ	060070010	○	×	×	×
閑	閑	060110010	○	×	×	×
駕	駕	060130010	○	×	×	×
幾	き	現行の字体	×	○	○	○
幾	幾	070040010	○	×	×	×
幾	幾	070040020	○	○	×	×
起	起	070110010	○	○	○	○
久	く	現行の字体	×	○	○	○
久	久	080010010	○	×	×	×
計	け	現行の字体	○	○	○	×
氣	氣	090030010	○	○	×	○
个	个	090010010	×	○	○	○
希	希	090020010	×	○	○	×
古		学術用に該当字体なし	○	×	×	×
古	古	100010010	×	×	○	×
己	こ	現行の字体	○	○	○	○
己	ら	100020010	○	×	×	×
故	故	100030010	○	×	×	×
許	許	100070010	○	×	×	×
左	さ	現行の字体	×	○	○	○
左	さ	110030010	○	×	×	×
佐	佐	110020020	×	○	○	×
散	散	110050010	○	×	×	×
斜	斜	110060010	○	×	×	×
之	し	現行の字体	×	○	○	×
之	之	120010010	○	×	×	×
之	し	120010020	○	○	○	○
事	事	120020010	○	×	×	×

志	志	120050010	○	○	○	○
新	新	120070010	○	×	×	×
寸	す	現行の字体	×	○	○	○
寸	寸	130030010	×	○	×	×
數	數	130040020	○	×	×	×
寿	壽	130020010	×	○	×	×
春	春	130050010	○	×	×	○
春	春	130050030	×	○	○	×
須	須	130060010	×	×	×	○
須	須	130060020	×	×	×	○
世	せ	現行の字体	×	○	○	×
世	世	140010030	○	×	○	○
勢	勢	140020010	○	×	×	×
曾	そ	現行の字体	×	○	○	×
曾	曾	150020020	×	○	○	○
楚	楚	150030010	×	×	○	×
所	所	150010010	○	×	×	×
處	處	150050010	○	×	×	×
處	處	150050020	○	×	×	×
太	た	現行の字体	×	○	○	○
堂	堂	160010010	○	○	○	○
多	多	160020010	○	○	○	×
多	多	160020020	×	○	○	○
多	多	160020030	×	×	×	○
當	當	160050010	○	×	×	×
知	ち	現行の字体	×	○	○	○
知	知	170040010	○	×	×	×
地	地	170020010	○	○	○	×
遲	遲	170060010	×	×	×	○
川	っ	現行の字体	×	○	○	○
川	川	180010010	○	○	○	○
川	川	180010020	○	○	×	×
都	都	180040010	○	×	×	×
徒	徒	180020010	×	○	○	×

天	て	現行の字体	×	○	○	○
天	𠄎	190050020	○	×	×	×
天	𠄎	190050030	×	○	○	×
傳	𠄎	190040010	×	×	×	○
帝	𠄎	190060010	×	×	×	○
轉	𠄎	190080010	○	×	×	×
止	と	現行の字体	×	○	○	○
止	𠄎	200050020	×	○	×	○
止	𠄎	200050030	×	○	○	×
度	𠄎	200020010	○	×	×	×
東	𠄎	200040010	○	×	×	×
登	𠄎	200060020	○	○	○	○
徒	𠄎	「と」として使用，学術用は「つ」 (180020010)として登録	○	×	×	×
奈	な	現行の字体	○	○	○	○
奈	𠄎	210030010	○	×	×	×
奈	𠄎	210030020	×	○	×	○
奈	𠄎	210030030	×	○	○	○
難	𠄎	210060010	○	×	×	×
那	𠄎	210050010	○	×	×	×
那	𠄎	210050020	×	○	○	×
仁	に	現行の字体	○	○	○	○
爾	𠄎	220060010	○	○	○	×
爾	𠄎	220060020	×	○	○	○
丹	𠄎	220010010	×	○	×	×
耳	𠄎	220080010	○	○	○	○
奴	ぬ	現行の字体	○	○	○	○
努	𠄎	230010010	○	○	○	○
怒	𠄎	230030010	×	×	×	○
襴	ね	現行の字体	×	×	○	○
襴	𠄎	240070010	○	○	×	×
年	𠄎	240030010	○	×	×	×
年	𠄎	240030020	×	×	○	○
乃	の	現行の字体	×	○	○	○

乃	乃	250010010	○	○	○	○
能	𠂔	250030010	○	×	×	×
能	𠂔	250030020	○	○	○	○
農	𠂔	250040010	×	○	×	×
波	は	現行の字体	×	○	×	○
波	𠂔	260040010	○	×	×	×
破	𠂔	260060010	○	×	×	×
八	𠂔	260010010	×	○	○	○
盤	𠂔	260050020	×	○	×	×
者	𠂔	260080010	○	×	×	×
者	𠂔	260080020	×	○	○	○
比	ひ	現行の字体	×	○	○	○
比	𠂔	270040010	○	×	×	×
悲	𠂔	270020010	○	×	×	×
日	𠂔	270030010	×	○	○	×
非	𠂔	270060010	○	×	×	×
飛	𠂔	270070020	○	○	×	×
不	ふ	現行の字体	○	○	○	○
布	𠂔	280030010	○	○	○	×
婦	𠂔	280020010	×	○	○	×
部	へ	現行の字体	×	○	○	○
部	𠂔	290070020	○	×	×	×
倍	𠂔	290010010	○	×	×	×
弊	𠂔	290030020	○	×	×	×
遍	𠂔	290050010	×	○	○	×
邊	𠂔	290060010	×	○	×	×
保	ほ	現行の字体	×	×	×	○
保	𠂔	300010030	×	○	○	×
保	𠂔	300010010	○	×	×	×
保	𠂔	学術用に該当字体なし	○	×	×	×
報	𠂔	300020010	○	×	×	×
本	𠂔	300050010	×	×	×	○
本	𠂔	300050020	×	○	○	×

末	ま	現行の字体	×	○	○	○
末	𪛗	310020010	○	×	×	×
末	𪛘	310020020	×	×	○	○
萬	𪛙	310050010	○	×	×	×
万	𪛚	310010010	×	○	○	×
満	𪛛	310030010	×	○	○	○
美	み	現行の字体	×	○	○	○
美	𪛜	320030010	○	×	×	×
美	𪛝	320030020	○	×	×	×
見	𪛞	320040010	○	○	○	○
三	こ	320010010	×	○	○	○
武	む	現行の字体	×	○	○	○
武		学術用に該当字体なし	○	×	×	×
無	𪛟	330040010	○	○	○	×
牟	𪛠	330050010	○	×	×	×
女	め	現行の字体	○	○	○	○
面	𪛡	340030010	○	×	×	×
免	𪛢	340010010	×	×	○	○
毛	も	現行の字体	×	×	○	○
毛	𪛣	350020010	○	×	×	×
毛	𪛤	350020020	○	○	○	○
毛	𪛥	350020040	×	○	○	○
毛	𪛦	350020050	×	○	×	×
毛	𪛧	350020060	×	○	○	○
毛	𪛨	350020070	×	○	○	○
母	𪛩	350010010	○	×	×	×
裳	𪛪	350040010	○	×	×	×
无	𪛫	「も」として使用，学術用は「む」 (330020010)として登録	○	×	×	×
也	や	現行の字体	○	○	○	○
也	𪛬	360010020	×	×	×	○
也	𪛭	360010030	×	○	×	×
夜	𪛮	360030010	○	×	×	×
耶	𪛯	360050020	○	×	×	×

屋	𠩺	360040010	×	○	○	×
由	ゆ	現行の字体	×	○	○	○
由	𠩺	370020010	○	○	×	×
遊	𠩺	370030010	○	×	×	×
遊	𠩺	370030020	×	○	×	×
與	よ	現行の字体	×	○	○	○
與	𠩺	380030020	○	×	×	×
餘	𠩺	380040010	○	×	×	×
良	ら	現行の字体	×	○	○	○
良	𠩺	390020010	○	×	×	×
良	𠩺	学術用に該当字体なし	○	×	×	×
良	ら	390020020	×	○	○	×
羅	𠩺	390010010	○	○	×	×
等	𠩺	「ら」として使用，学術用は「と」 (200080010)として登録	○	×	×	×
利	り	現行の字体	×	○	○	×
利	𠩺	400010020	○	○	○	○
理	𠩺	400040010	○	×	×	×
里	𠩺	400050010	○	○	○	○
李	𠩺	400020010	×	×	○	×
留	る	現行の字体	○	○	○	○
留	𠩺	410020010	○	×	×	×
留	𠩺	410020020	○	×	×	×
留	𠩺	410020030	×	○	○	○
流	𠩺	410010010	○	○	×	×
流	𠩺	学術用に該当字体なし	○	×	×	×
累	𠩺	410030010	×	○	×	×
類	𠩺	410040010	×	○	○	×
禮	れ	現行の字体	×	○	○	○
禮	𠩺	420010030	×	○	×	○
禮	𠩺	420010020	○	×	×	×
連	𠩺	420020010	×	○	○	×
呂	ろ	現行の字体	×	○	○	○

呂	𠄎	430020010	○	×	×	×
呂	𠄎	430020020	○	×	×	×
路	𠄎	430050010	×	×	×	○
和	わ	現行の字体	×	×	×	○
和	和	440020010	○	×	×	×
和	わ	440020020	×	○	○	×
王	𠄎	学術用に該当字体なし	○	×	×	×
爲	ゐ	現行の字体	○	○	○	○
井	井	450010020	×	×	○	×
惠	ゑ	現行の字体	○	×	×	○
惠	ゑ	460010020	×	○	○	×
遠	を	現行の字体	×	○	○	○
遠	を	470050010	○	×	×	×
遠	と	470050020	×	○	○	×
越	越	470040010	×	○	○	○
无	ん	現行の字体	×	○	○	○

全体を通してみると、①秋萩帖以外の①柏木②桐壺③法華経の三種のテキストに用いられている変体仮名については、全て学術用に置き換えることができた。①秋萩帖についてもほとんどの字体について、学術用は対応していることが分かる。対応する字体がなく、備考欄に「学術用に該当字体なし」としたものは、字母「古」「保」「武」「良」「流」「王」の字体で、これらについては①秋萩帖で使用されている文字の画像をそのまま示している。これらの字体は①秋萩帖以外のテキストにおいてはあまり見られないものであり、実際に今回の検証でも三種のテキストにおいては見られなかった。備考にあるような注を加えれば、問題ないものと思われる。あまりにも学術用に該当しない字体が多いと問題であるが、これは個別に対応できる範囲である。

①柏木②桐壺③法華経の三種のテキストにおいては使用される字体に共通するものが多く見られた。中世～近世と比較的近い時代のものであることがその要因であろう。一方①秋萩帖と三種テキストでは、共通して用いられる字体も存在したものの、使用される字体の傾向には大きな隔たりが見られた。やはり時代差によるものであると思われる、有用性を確かめる上では、もっと時代に幅を持たせる必要があった。

以上のようにまだ検証の余地はあるものの、実際の仮名字体研究においても、学術用は有用であるものと思われる。異なるテキスト間において用いられる字体の対照表を作成することもできた。ただしこころまでは、既存の変体仮名ツール（Koin, 文字鏡など）でも、行おうと思えば可能である。単に字体の画像を示すだけならば、学術用でなくとも良い。学術用の真価は、複数のテキスト間比較における「指標」としての役割にある。

### 3. 複数テキスト間比較における「指標」としての学術用の利用の試み

これまでの仮名字体研究においては、変体仮名を示す方法が個人によって異なり、複数の学術論文間における字体の同定が難しかった。そのため字体の研究は、個々のテキストについての個別的なものが多く、そこに見られる字体の使用法に一般性を求める研究というものは、あまり行われてこなかった。全体を見通すためには、個人が膨大な量の情報を処理するしかなかったからである。文法や語彙などの研究は、デジタル化したテキストによって、大量の情報を扱うことができるが、変体仮名の場合、デジタル化に際して現行の字体に改められると、字体情報が失われてしまう。データベース化が困難であり、共同研究を行うにしても工夫が必要であった。

変体仮名を含むテキストをデジタル化しようとした時、従来の研究では以下のような方法が用いられてきた。

- ①変体仮名を現行の字体に翻刻。仮名字体の情報は完全に失われ、字体研究には使用不可。
- ②変体仮名をその字母の漢字で代用。ある程度使用される仮名字体は絞られるが、どの字体かまでは同定できない。テキストとは別に、具体的な字体を示す必要がある。なお一字母に対して複数の字体がある場合や、現行字体と同字母である場合に対応できない。
- ③字母で代用、かつ同字母ながら字体が著しく異なる場合には 123 や ABC などの下位分類を設ける。データ上での差異を示すことは可能であるが、やはりテキストとは別に、具体的な字体を示す必要がある。

上記の①②③のような方法によるテキストについても、学術用の整理番号を付与することにより、学術用を指標として、コンピュータ上での比較が可能となる。前述の三種の電子テキスト①②③が下記のようにそれぞれ①②③に対応しており、以下のサンプルのように、電子テキストが既に作成されている。なおいずれも元のデータにおいては縦書きであった。

#### ①柏木（方法①）

（1オ）

右衛門のかんの君なをかくの【三】なや【三】わたり給ことをこたらてとしも  
かへりぬおと、北のかたのおほしなけくさまをみたてまつるにしみてかけはなれ  
なんいのちのかひなくつ【三】をもかるへきことをおもふ心【八】心としてまたあなちち  
此世をはなれかたうおし【三】と、めまほしきみか【八】いはけなかりし程よりおもふ心こと  
にたかくなにことにも人に【八】いま一きは【八】まさらんおほやけたくしのことに  
ふれつ、なのめならず思のほりしかとそのことかなひかたかりけりと一ふたつのふしに  
身を思おとしてしこなたなへて世中すさましく思なりて後の世のをこな  
ひにほいふかくす、【三】にしかとおやたちの御恨を思ひて野山にあくかれんみちの  
をもきほたしなるへくおもほえしか【八】とさまかうさまにまきら【八】しつ、くしきつるを  
つぬにかく世にたちまうへくもおほえぬ物おもひの一かたならず身にそひ

## ②桐壺（方法㊦）

(1オ)

い徒連の【御】【時】尔可【女】【御】【更】【衣】あま多佐ふ  
 らひ【給】て个る【中】尔いとやむことな起き八@「て」を見せ消ち  
 尔八あらぬ可すく連て【時】めき【給】あり个李  
 者しめより【我】八とおもひあ可り【給】へる【御】か多／＼  
 めさましき【物】尔おとしめそね三【給】ふおなし  
 【程】楚連より希らう能かうい多ち八まして  
 やすから春あさゆふの【宮】つ可へ尔徒けても【人】  
 の【心】をの三うこかしうら三をふ徒もり尔や@「をふ」〈ママ〉

## ③法華経（方法㊧）

(474頁)

《妙》《法》《蓮》《華》《経》《如》《来》《寿》《量》《品》《第》《十》《六》

そC のA とB 起 耳 本 とB 気 もD 路 〳 能 《菩》《薩》 おA よB  
 ひ

《一》《切》のB 《大》し ゆ 尔B つB 気 た ま 者 く もD

路 〳 のA

せA ん なC ん し なC ん 堂 ち ま さ に 《如》《来》のB

し や う

多B ひ のA 三 こ とB を 志 ん 気 す へ し ま た 《大》《衆》

につA 気 多B 満 者 く なC ん 多B ち ま さ に 《如》《来》のA

し

や う 堂 ひ 能 三 こ とB を 志 む 気 す へ し ま 多B

ま 多B もD 路 〳 のB 《大》し ゆ 尔B つB 気 た ま 者 く なD

ん 堂 遅 ま さ に 《如》《来》のA し や う 多B ひ のB 三

こ とB を 志 む 気 す へ し こ 能 とA きB に 《菩》《薩》《大》

《衆》

以上のように、電子テキストの状態では、三種のテキストに用いられている字体を比較対照することはできない。変体仮名の情報が付与されていない、あるいは付与されていても電子テキストだけでは特定できないためである。比較するために指標が必要となり、そこで学術用を利用するのである。冒頭約5000字（①は1オ～5ウ、②は1オ～10ウ、③は474頁～485頁）を対象範囲として、それぞれの文献について、以下のような作業を行った。

①柏木

原本と電子テキストを照らし合わせ、該当する学術用の整理番号を入力。全て手作業で行う必要があった。ただし「ㄐ」「ㄑ」のみは、電子テキストにおいて【八】【三】と表記されていたので、一括入力が可能であった。ただし今回は念のために全て確認を行った。

②桐壺

電子テキストに用いられている字母が、学術用のどの字体に該当するのかを確認する必要があった。同字母でも複数字体が存在するため、結局全て手入力で行った。例えば電子テキストにおいて「多」で表記されている字体は、原本においては「𑖑」「𑖒」の二種の字体が用いられていた。ある程度入力した段階で、一字母一字体であることが判明すれば、一括入力も可能であるが、今回は念のために全て確認を行った。

③法華経

字母をABCと下位分類しているのので、理論上は一括入力が可能である。ただし下位分類を設けずに、包摂してしまっているものもあるので、ある程度の確認は必要である。例えば電子テキストにおいて「須」で表記されている字体は、原本においては「𑖑」「𑖒」の二種の字体が用いられていた。このような場合、少なくともそのような字体については、必ず確認を行わなければならない、結局今回は念のため全て確認を行った。

以上のように、②桐壺、③法華経については、該当する字体が確定すれば、一括変換も可能であり、このような既存のテキストを利用することも可能である。ただ実際に原本においては異なる字体が使用されているのにもかかわらず、一括変換により、データに反映されないという事態が生じる可能性も捨て切れない。正確さを期するのであれば、初めから学術用の番号を付与することが望ましいのかもしれない。ただこれも研究の目的によって、どこまで字体を区別するかは異なり、必ずしも学術用の基準に従わなければならないという訳ではない。

さてこのように電子テキストに学術用の情報を付加することによって、同一の基準による使用字体の比較が可能となる。それぞれのテキストの使用字体および用例数を対照させたものが、表2である。用例数については、テキスト間の比較というよりも、テキスト内における同一の仮名の他の字体との比較という目的で掲載したものであり、どの字体の使用頻度が高いか分かるようにしたものである。なお「本文」は、電子テキスト本文内において、変体仮名の字体がどのように置き換えられているかを示している。

表2 三種のテキストにおける使用仮名字体および使用数対照表

学術用整理番号	字体	①柏木		②桐壺		③法華経	
		本文	用例数	本文	用例数	本文	用例数
010010020	あ	あ	41	×	0	×	0
010040010	阿	あ	4	阿	25	阿	27
現行の字体	あ	あ	11	あ	31	あ	24
020010010	い	×	0	×	0	いA	14

020020010	伊	×	0	伊	1	×	0
現行の字体	い	い	60	い	60	いB	20
現行の字体	う	う	36	う	51	う	110
040020010	江	×	0	×	0	江	4
040050020	え	え	14	え	19	え	11
現行の字体	え	え	3	え	7	え	5
050010020	お	お	17	お	45	おA	20
現行の字体	お	お	36	お	17	おC	1
060030010	か	か	2	×	0	×	0
060030020	可	か	88	可	71	可B	56
現行の字体	か	か	62	か	68	か	22
070040020	き	き	11	×	0	×	0
070050010	支	き	19	支	2	×	0
070110010	起	き	22	起	15	起	18
現行の字体	き	き	47	き	74	きB	48
現行の字体	く	く	63	く	59	く	114
090010010	ヶ	け	11	个	27	个	5
090020010	希	け	7	希	6	×	0
090030010	氣	け	5	×	0	氣	35
090020010	遣	け	10	遣	8	×	0
現行の字体	け	け	17	け	3	×	0
100010010	古	×	0	古	6	×	0
現行の字体	こ	こ	67	こ	51	こ	93
110020020	佐	さ	13	佐	35	×	0
現行の字体	さ	さ	41	さ	33	さ	40
120010020	し	し	86	し	120	し	223
120050010	志	し	27	志	12	志	14
現行の字体	し	し	30	し	10	×	0
130020010	春	す	1	×	0	×	0
130030010	寸	す	2	×	0	×	0
130050010	春	×	0	×	0	春	1
130050020	春	す	12	春	8	×	0
130060010	須	×	0	×	0	須	7
130060020	須	×	0	×	0	須	17
現行の字体	す	す	20	す	44	す	30
140010030	せ	×	0	せ	19	せA	43
現行の字体	せ	せ	16	せ	19	×	0

150020020	ろ	そ	14	そ	2	そC	25
150030010	拵	×	0	楚	1	×	0
現行の字体	そ	そ	11	そ	24	×	0
160010010	堂	た	6	堂	1	堂	24
160020010	多	た	22	多	10	×	0
160020020	と	た	65	多	45	多B	55
160020030	と	×	0	×	0	多B	1
現行の字体	た	た	2	た	23	た	10
170020010	地	ち	1	地	2	×	0
170060010	遅	×	0	×	0	遅	2
現行の字体	ち	ち	23	ち	23	ち	35
180010010	川	つ	3	つ	6	つA	35
180010020	つ	つ	1	×	0	×	0
180020010	徒	つ	4	徒	5	×	0
現行の字体	つ	つ	46	つ	39	つB	15
190040010	傳	×	0	×	0	傳	3
190050030	て	て	22	て	52	×	0
190060010	帝	×	0	×	0	帝	12
現行の字体	て	て	55	て	35	てB	77
200050020	と	と	17	×	0	とA	33
200050030	と	と	1	と	98	×	0
200060020	登	と	1	登	3	登	7
現行の字体	と	と	116	と	28	とB	83
210030020	な	な	7	×	0	なC	42
210030030	な	な	124	な	93	なD	36
210050020	那	な	2	那	2	×	0
現行の字体	な	な	4	な	46	なB	2
220010010	に	に	1	×	0	×	0
220060010	尔	に	14	尔	9	×	0
220060020	尔	に	59	尔	56	尔B	65
220080010	耳	に	13	耳	2	耳	16
現行の字体	に	に	25	に	36	に	26
230030010	怒	×	0	×	0	怒	2
現行の字体	ぬ	ぬ	24	ぬ	11	ぬ	1
240030020	年	×	0	年	6	年	2
240070010	ね	ね	5	×	0	×	0
現行の字体	ね	×	0	ね	3	ね	7

250010010	乃	の	23	の	32	のA	50
250030020	能	の	21	能	57	能	38
250040010	若	の	1	×	0	×	0
現行の字体	の	の	52	の	28	のB	67
260010010	ハ	ハ	81	ハ	94	ハ	13
260050020	ハ	ハ	2	×	0	×	0
260080020	者	ハ	33	者	31	者	38
現行の字体	ハ	ハ	2	×	0	ハ	32
270030010	日	ヒ	2	日	1	×	0
270070020	日	ヒ	8	×	0	×	0
現行の字体	ヒ	ヒ	42	ヒ	41	ヒ	44
280020010	婦	フ	1	婦	1	×	0
280030010	布	フ	4	布	3	×	0
現行の字体	フ	フ	32	フ	31	フ	14
290050010	遍	ヘ	5	遍	25	×	0
290060010	遍	ヘ	1	×	0	×	0
現行の字体	ヘ	ヘ	46	ヘ	16	ヘ	29
300010030	ほ	ほ	8	ほ	45	×	0
300050010	本	×	0	×	0	本	24
300050020	本	ほ	24	本	2	×	0
現行の字体	ほ	×	0	×	0	ほ	4
310010010	万	マ	16	万	8	×	0
310020020	マ	×	0	マ	1	マ	27
310030010	満	マ	12	満	2	満	5
現行の字体	マ	マ	63	マ	54	マ	26
320010010	三	ミ	28	三	22	三	48
320040010	見	ミ	2	×	0	×	0
現行の字体	ミ	ミ	16	ミ	20	ミ	1
330040010	無	ム	2	無	1	×	0
現行の字体	ム	ム	16	ム	28	ム	34
340010010	免	×	0	免	1	免	1
現行の字体	め	め	27	め	35	め	19
350020020	も	モ	32	も	13	もA	3
350020040	も	モ	23	も	13	もD	32
350020050	も	モ	1	×	0	×	0
350020060	も	モ	1	も	4	もD	19
350020070	も	モ	33	も	43	もC	3

現行の字体	も	×	0	も	1	もB	13
360010020	巾	×	0	×	0	や	29
360010030	や	や	1	×	0	×	0
360040010	屋	や	6	屋	3	×	0
現行の字体	や	や	35	や	18	や	27
370020010	ゆ	ゆ	3	×	0	×	0
370030020	掬	ゆ	1	×	0	×	0
現行の字体	ゆ	ゆ	5	ゆ	16	ゆ	51
現行の字体	よ	よ	22	よ	27	よB	32
390010010	罹	ら	1	×	0	×	0
390020030	ら	ら	61	ら	47	×	0
現行の字体	ら	ら	11	ら	19	ら	34
400010020	刎	り	7	り	93	り	19
400020010	李	×	0	李	1	×	0
400050010	里	り	2	里	8	里	25
現行の字体	り	り	83	り	4	×	0
410010010	る	る	5	×	0	×	0
410020030	る	る	59	る	61	るB	35
410030010	る	る	3	×	0	×	0
410040010	類	る	1	類	3	×	0
現行の字体	る	る	3	る	1	るA	7
420010030	れ	れ	6	×	0	れ	14
420020010	連	れ	15	連	41	×	0
現行の字体	れ	れ	33	れ	6	れ	14
430050010	路	×	0	×	0	路	26
現行の字体	ろ	ろ	8	ろ	8	ろ	8
440020020	わ	わ	1	わ	5	×	0
440030010	王	わ	13	王	11	×	0
現行の字体	わ	×	0	×	0	わ	16
450010020	井	×	0	井	1	×	0
現行の字体	ゐ	ゐ	6	ゐ	1	ゐ	1
460010020	ゑ	ゑ	2	ゑ	1	×	0
現行の字体	ゑ	×	0	×	0	ゑ	8
470040010	越	を	20	越	6	越	2
470050020	を	を	30	を	53	×	0
現行の字体	を	ん	14	を	1	を	100
現行の字体	ん	ん	27	ん	7	ん	89

表2では、同一の字体を横一列に並べ、三種のテキストで共通して用いられている字体がすぐに判別できるようにしてある。現行の字体は三種で共通して用いられているものが多く、「け」「し」「せ」「そ」「ね」「は」「ほ」「も」「り」「わ」「ゑ」以外は、三種全てで用いられていた。変体仮名の方に目を向けると、三種共通して用いられているのは、「ㇿ」「し」「む」「う」「𪛗」「𪛘」「𪛙」「ろ」「𪛚」「𪛛」「𪛜」「あ」「よ」「ろ」「乃」「𪛞」「𪛟」「𪛠」「𪛡」「𪛢」「𪛣」「𪛤」「𪛥」「𪛦」「𪛧」「𪛨」「𪛩」「𪛪」「𪛫」「𪛬」「𪛭」「𪛮」「𪛯」「𪛰」「𪛱」「𪛲」「𪛳」「𪛴」「𪛵」「𪛶」「𪛷」「𪛸」「𪛹」「𪛺」「𪛻」「𪛼」「𪛽」「𪛾」「𪛿」であった。使用されている字体のみを挙げている字体表においては、これら共通して使用される字体が、どのテキストにおいても均質に用いられているような印象を受けるかもしれない。だが各字体の用例数を併記することにより、同じ字体でも、テキストごとに使用状況が異なっているということが分かる。たとえば「ㇿ」についてしてみると、②桐壺、③法華経においては、現行字体「あ」と同程度用いられているが、①柏木においては「ㇿ」の使用は少なく、主として「あ」が用いられているのである。

字体ごとの使用頻度の差は何故生まれるのか。一般的に言われているのが、字体を使い分けることによって、判読の補助とする、所謂「仮名文字遣い」の存在である。自立語の語頭とそれ以外、あるいは助詞とそれ以外を使い分けることによって、文節の区切りをはっきりとさせることは当然考えられる。ただそれ以外の、例えば語を作る要素としての文字ではなく、文字列を作る図形としての文字の役割による使い分けといったことは考えられないだろうか。また文節頭と非文節頭で使い分ける場合、何故文節頭は「か」「た」で、非文節頭は「う」「ゝ」なのだろうか。学術用を応用し、別の角度から検証していきたい。

#### 4. 連綿と字体選択の関係についての研究—異なるテキスト間でも同じ傾向が見られるか—

一つの仮名に対して、複数の字体がある場合、連綿のし易さで字体が選択されることもあるのではないだろうか。これは従来の研究を否定するものではなく、従来の研究に新たな視点を加えることによって、多角的に仮名字体を検証する試みである。文節の切れ目が、連綿の切れ目と一致し、所謂「分かち書き」<sup>5</sup>が行われる場合、字体の選択に連綿のし易さが関係してくるのではないかと仮定して検証を行いたい。

例えば文節頭に「か」が、非文節頭に「う」が用いられる傾向が見られるテキストがあるとす。その場合、単に文節の切れ目を示すのであれば、文節頭に「う」で、非文節頭に「か」でも良いのではないかという疑問が生じる。位置による使い分けであれば、逆でも成立するはずである。これは自明のこととして捉えられてきたのかもしれないが、やはり「う」という字体の、連綿のし易さに理由があるのではないだろうか。「か」に比較すると「う」は、上の字を受け、下の字にも繋げ易い形をしているのである。

このような連綿についての研究は、従来の方法では難しかったかもしれないが、学術用を用いれば、データに連綿の情報を付加することにより可能となる。学術用という同一の基準により、

<sup>5</sup> 連綿による分かち書きの可能性は、小松（2006: 70）において以下のように示されている。「語句と語句との間隔を開けなくても、適切な箇所でも墨継ぎをすれば境界が自然に明示されるし、墨を継がなくても、連綿するかしないかで断続が標示できる。連綿による分かち書きができる書体は草書体だけであった。」

異なるテキスト間における比較も容易にできるのである。

試みに〈カ〉の仮名について検証を行ってみた結果が下記の表3である。まずは文節頭と非文節頭で大きく分け、それぞれ上の字からのみ連綿している用例数（上接）、下の字へとのみ連綿している用例数（下接）、上の字から連綿して下の字へも連綿している用例数（両方）、上下の字と全く連綿していない用例数（独立）を示した。

表3 〈カ〉の仮名の使い分けと連綿情報

資料名	字体(総数)	文節頭					非文節頭				
		上接	下接	両方	独立	合計	上接	下接	両方	独立	合計
①柏木	ゐ (2)	0	1	0	0	1	0	0	0	1	1
	う (86)	0	1	0	0	1	14	9	52	10	85
	か (62)	1	44	1	7	53	0	7	1	1	9
②桐壺	う (71)	0	0	0	1	1	9	19	38	4	70
	か (68)	0	28	0	0	28	0	40	0	0	40
③法華経	う (56)	0	3	3	2	8	5	11	20	12	48
	か (22)	0	8	0	11	19	0	2	0	1	3

①柏木は「か」を文節頭に置くことを、強く意識していたものと思われる。「か」を文節頭に置き、そこから下に連綿して書くというのが、基本的なスタイルのようである。なお「か」には独立の例もあるが、文節頭7例、非文節頭1例であり、「連綿させない」ことによって、文節頭であることを強調していた可能性がある。一方の「う」は、文節頭に用いられることはほとんどなかった。その形状から、上から連綿させることも、下へ連綿することも、し易かったのであろう。上から連綿することも多く、文節中末に用いられていたことがうかがえる。また非文節頭の独立10例のうち、8例が疑問の助詞「か」であったことが判明しており、文節末であることを強調していた可能性があった。

②桐壺は「か」68例の内、文節頭に用いられていたのは、28例にとどまった。「か」を文節頭に用いるという意識がなかった訳ではないだろうが、それ以上に「連綿の切れ目から用いる」という意識が働いたのではないかと考えられる。68例全てが下へのみ連綿しており、起点として用いられた可能性が高い。語を作る要素としての文字の役割ではなく、文字列を作る図形としての文字の役割が重視されたのではないだろうか。ただ一方の「う」は、文節頭にはほぼ用いられておらず、確かに「か」と「う」の使い分けの意識は存在していたのである。

③法華経もやはり文節頭に「か」が用いられていた。ただ文節頭の「か」から下へのみ連綿していくものは半数以下で、19例の内11例が独立していた。これはやはり意図して行ったものであろうか。③法華経においては、「う」が文節頭に用いられることが比較的多かった。③法華経には、句の切れ目を示していると思われる補助点が打たれており、これは文節の単位よりも長めであったため、文節の意識の異なりによるものではないかと考えられる。また③法華経の「う」は独立しているものも多いようであったが、独立しているものの共通点は見当たらなかった。

以上、テキストによって差異はあったが、文節頭には「か」を用いるという点では共通していた。そして「か」は上から連綿することが極めて稀であった。一方の非文節頭に用いられる「う」は、上から連綿することも、下へ連綿することもあった。やはりこの連綿の差が、使用される位置の差にもつながってくるのではないかと考えられる。すなわち、上からは連綿しにくいが下へは連綿し易い「か」を文節頭に、上から連綿させることも下へ連綿することもできる「う」を非文節頭に用いるようになったのではないかとということである。このように共通の傾向を示す場合もあるが、テキストによって大きな違いを生じる場合もある。表4は〈カ〉と同様に、〈夕〉の仮名について検証した結果である。

非文節頭には「ㇿ」を用いるという点は共通している。「ㇿ」は上から連綿し、下へも連綿する。〈カ〉における「う」に該当する字体である。その一方で、文節頭に用いられる字体は、テキストによって異なるようである。①柏木は「堂」「氺」、②桐壺は「氺」「た」、③法華経は「堂」を文節頭に用いる傾向が見られた。この内「堂」「氺」については、下へ連綿するという点で共通している。下へ連綿させ易いので、文節頭に用いやすかったのではないだろうか。問題は「た」で、三者三様の用いられ方をしている。①柏木はそもそも用例数が非常に少なく、独立して使用されている。②桐壺においては、文節頭よりも非文節頭における使用がやや多いが、いずれも下へ連綿するものと独立して使用されるものであった。③法華経は非文節頭において一部独立して使用されるものの、ほとんどが上からの連綿となっている。下へ連綿する②桐壺と、上から連綿する③法華経では、反対の性質を持っているのである。やはり連綿のし易さも、書き手によって異なるのであろう。同じ字体を用いていても、その意味は全く異なるということもある。このように複数のテキストを比較することによって、それが初めて明らかになるのである。

表4 〈夕〉の仮名の使い分けと連綿情報

資料名	字体(総数)	文節頭					非文節頭				
		上接	下接	両方	独立	合計	上接	下接	両方	独立	合計
①柏木	堂 (6)	0	3	0	1	4	0	2	0	0	2
	氺 (22)	0	13	0	1	14	0	7	0	1	8
	ㇿ (65)	0	2	1	0	3	9	10	43	0	62
	た (2)	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1
②桐壺	堂 (1)	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	氺 (10)	0	4	0	0	4	0	6	0	0	6
	ㇿ (45)	0	1	0	0	1	24	3	16	1	44
	た (23)	0	3	0	4	7	0	7	1	8	16
③法華経	堂 (24)	0	14	0	2	16	0	6	1	1	8
	ㇿ (55)	0	1	0	3	4	17	22	4	8	51
	ㇿ (1)	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	た (10)	0	0	0	0	0	8	0	0	2	10

特定の助詞に決まった字体を用いるということも、よく見られる使い分けである。例えば近世版本においては、係助詞の「は」に「𠄎」を用いる傾向が見られることがある<sup>6</sup>。そこにも連綿が関わっていることがあるのだろうか。検証した結果が下記の表5である。文節頭と非文節頭ではなく、助詞とそれ以外で大別し、連綿の状況によってさらに分類した。

助詞として用いられる字体のほとんどが、独立して用いられていた。上下に連綿させず、独立して用いるのが、助詞の一つの特徴と言っていいたろう。③法華経においては「𠄎」は、ほぼ助詞専用となっているが、①柏木、②桐壺においては、助詞以外に用いられることもある。その場合は連綿が行われ、①柏木は上下に、②桐壺は下へと連綿する特徴が見られた。「𠄎」を用い、その上で独立させて書くことが、助詞の指標となっているようである。③法華経においては「𠄎」よりも「は」の方が多く助詞として用いられるが、やはり「は」も独立して助詞として用いられていた。なお助詞以外には、いずれのテキストにおいても、主として「𠄎」が用いられるようである。元々は漢字「者」に助詞「は」の訓をあてたことから、「𠄎」が〈ハ〉の平仮名として用いられるようになったはずであるが、今回使用したテキストにおいては、「𠄎」と助詞「は」の結びつきは強くなかったようである。いつ頃から助詞「は」と「𠄎」の結びつきが弱くなり、「𠄎」との結びつきが強くなったのかも、興味深いところである。

ところで近代の活版印刷において、字体が統一される中、この「𠄎」が根強く残り続けたのも、このように連綿せず、独立して用いられていたことが関わっていたのかもしれない。前述の「ㇿ」などは、連綿の中にこそ生きる字体であったため、活字の中で姿を消していったが、「𠄎」は元々独立性が高く、活字の中においても、写本や版本と同じように用いることができたのではないかということである。

表5 〈ハ〉の仮名の使い分けと連綿情報

資料名	字体(総数)	助詞					助詞以外				
		上接	下接	両方	独立	合計	上接	下接	両方	独立	合計
①柏木	𠄎 (81)	0	0	1	46	47	0	4	28	2	34
	𠄎 (2)	1	0	0	1	2	0	0	0	0	0
	𠄎 (33)	2	0	1	3	6	3	14	8	2	27
	は (2)	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0
②桐壺	𠄎 (94)	0	1	0	49	50	0	41	0	3	44
	𠄎 (31)	1	1	0	1	3	4	19	5	0	28
③法華経	𠄎 (13)	0	0	0	12	12	0	1	0	0	1
	𠄎 (38)	1	1	0	2	4	7	18	4	5	34
	は (32)	8	0	0	24	32	0	0	0	0	0

<sup>6</sup> 例えば『春色梅兒譽美』における仮名字体調査を行った玉村(1994: 183)「表7 〈𠄎〉〈𠄎〉〈𠄎〉の機能別使用状況(初編)」にその傾向が見られる。

## 5. おわりに

以上のように、「学術情報交換用変体仮名」について、その有用性を検証した上で、仮名字体研究の新たな方法論を試みた。今回、電子テキストに関しては、他の研究者が作成したものを利用したが、その他の作業は全て個人で行った。そのため、字体、連綿の切れ目、文節の判定などは、個人的な基準によるものとなった。このような限られた範囲における研究であれば、それでも構わないのかもしれないが、学術用の真価は共同研究においてこそ発揮され、共同研究においては、共通の認識、基準が必要となる。今後膨大な量のテキストを複数人で扱うような場合、まずはそのマニュアルの作成から始めなければならないのかもしれない。また今回は結局、調査範囲内の原本の字体を全て確認して、学術用に当てはめていったため、その作業に多くの時間を要することになった。変体仮名に文字コードが与えられ、直接電子テキストを作成できるようになれば、そのような手間は解消するものと思われるが、その場合にも共同研究ということを前提にした共通の字体認識を確立することが求められるであろう。

今回行った連綿に関する研究は、字体の選択を別の角度から検証する一つの試みである。学術用を用い、今後もこのように様々な要素を踏まえて、字体の研究を行っていきたいと思うが、学術用は表記研究以外の研究成果を利用する上でも役に立つのではないかと考えられる。例えばコーパスなどと組み合わせることによって、使用される字体の偏差などを検証することができ、書き手の同定や、同じ書き手の筆でも、年代によって使用字体が変化するのかなども考察することができるであろう。また個人の研究においても、学術用の有用性は見込まれる。例えば学術用を用いることによって、研究者間で字体に対する共通認識が生まれ、これまで他の研究者の論文を引用する際に曖昧であった部分を解消できるかもしれない。

そうは言っても現状では学術用は画像でしか表示することができず、既存の変体仮名フォントと大差がない。むしろテキストに直接組み込めないという点では劣っているのかもしれない。学術用を用いずとも、これまでのように個々の研究者の創意工夫によって、仮名字体の研究はいくらでも可能である。ただ従来の研究においては、個々のテキストにおいて使用されている変体仮名について分類・記述しており、変体仮名を体系的に記述するという試みはなされてこなかったように思う。学術用は初めて文字コード規格に提案された変体仮名体系の一部であり、学術用が果たして変体仮名のスタンダードに成り得るのかは、この先議論が必要であろう。その点も含めて、今後も学術用を用いた研究を試みたいと思う。

## 参考文献

- 古谷稔 (1996) 『秋萩帖と草仮名の研究』 東京：二玄社。  
 小松英雄 (2006) 『日本語書記史原論 補訂版 新装版』 東京：笠間書院。  
 中田祝夫 (編) (1974) 『足利本仮名書き法華経 (影印篇)』 東京：勉誠社。  
 高田智和 (2016) 「変体仮名コード標準化の問題点」『東洋学へのコンピュータ利用第 27 回セミナー予稿集』 49-56。  
 高田智和・銭谷真人・斎藤達哉・矢田勉・小助川貞次・當山日出夫 (2015) 「学術情報交換のための変体仮名セット」『日本語学会 2015 年度春季大会予稿集』 173-178。  
 玉村禎郎 (1994) 「『春色梅兒譽美』における仮名の用字法」前田富祺 (編) 『国語文字史の研究』 2: 175-206。大阪：和泉書院。

**関連 Web サイト** (すべて 2016 年 7 月確認)

MJ 文字情報一覧表 変体仮名編

<http://mojikiban.ipa.go.jp/4488.html>

Proposal for Japanese HENTAIGANAs

<http://www.unicode.org/L2/L2015/15239-hentaigana.pdf>

学術情報交換用変体仮名 (国立国語研究所)

<http://kana.ninjal.ac.jp/>

米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文 (国立国語研究所)

<http://textdb01.ninjal.ac.jp/LCgenji/>

米国議会図書館蔵『源氏物語』画像 桐壺・須磨・柏木 (国立国語研究所)

[http://dglb01.ninjal.ac.jp/lcgenji\\_image/](http://dglb01.ninjal.ac.jp/lcgenji_image/)

## **The Inspection and Application of *hentaigana* for Academic Information Exchange in the Study of *kanajitai***

ZENIYA Masato

Adjunct Researcher, Language Change Division, Research Department, NINJAL

**Abstract**

This study selected and analyzed the use of *hentaigana* (変体仮名, variant kana) for academic information exchange to suggest its adoption into the International Standard ISO/IEC10646.

I had initially applied it to *Akihagijou*, *Kashiwagi*, *Kiritsubo*, and *Kanagaki Hokekyou*, after which I inspected its usefulness. Then, I added the element *renmen* to the *kanajitai* (the form of *hiragana*, a Japanese syllabary) database, and I conducted a study to inspect the factor for the use of *kanajitai* from a new viewpoint because *renmen* is not typically treated in the conventional study of *kanajitai*.

**Key words:** *hentaigana*, *kanajitai*, notation study, *renmen*, writing system